

マクナマラの老春紀行（04・4・19）

——ベトナム戦争とは何だったのか——

仲

晃（昭23・文乙）

はじめに

私はこの演題で、平成十六年四月十九日の三高「十八日会」で話したのですが、その後の激動する国際情勢などにかんがみて、全面的に書き直しました。

最も血なまぐさかった二十世紀

二十世紀後半の七年間、アメリカの国防長官をつとめたロバート・マクナマラの口癖は「二十世紀は人類史上最も血なまぐさい世紀だった」というもので、この百年の間に、一億六千万人の生命が暴力によって奪い去られた、と主張しています。古代や中世の歴史に詳しくない私には、そんな風に断言できるものかよく分かりません。たとえば、一三三九

年から一四五三年まで百十四年にわたって断続的に戦われ、終盤で例のジャンヌ・ダルクが活躍するイギリスとフランスの「百年戦争」などというものもあります。世紀をまたいでいるものの、これは戦火の止むことのなかった一世紀に違いありません。だが、そういう古い時代は別にして世界が一体感を持つようになった近代と現代に限ればマクナマラさんの慨嘆も分かるような気がします。二つの世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、旧ユーゴスラビア各地での殺戮など、二十世紀はまさに戦いに明け、戦いに暮れた百年でした。これらの戦争や紛争については、それぞれ数え切れないほどの著書や論文があり、このうちベトナム戦争も例外ではありませんが、意外なことにこの戦争についてわれわれはあまりよく知りません。二十世紀は歴史の中に入ったものの、積み残した大問題の一つがベトナム戦争であったのではなからうか。アメリカ兵五万八千人とベトナム国民の少なくとも三百四十万人の生命を奪ったあの恐るべきベトナム戦争をキチンと総括しないうちに、世の中はいつの間にかテロ戦争の時代になってしまった。アフガン、イラク戦争の時代になってしまった。ベトナム戦争の総括をしないまま、アフガン、イラク戦争の解明はできるのだろうか？

そう考えて、ベトナム戦争の真相解明に取り組み、教訓をくみ取ろうとしている老人がマクナマラです。ある意味でマクナマラは二十一世紀のドンキホーテといえると思います。

このドンキホーテには従者のサンチョ・パンザも、愛馬ロシナンテもいません。突撃する目標は、いわずと知れたベトナム戦争です。というより彼の真の標的は、実は人類の宿痾ともいべき「戦争」そのものなのです。一九一六年（大正五年）生まれの彼は、二〇〇四年に日本流でいう米寿を迎えましたが、ベトナム戦争の解明に賭ける情熱は一向に衰えを見せません。本日の演題をマクナマラの「老春紀行」と名付けたゆえんです。青春とは心の持ち方 (state of mind) であるといわれますが、マクナマラの老春は、姿を変えた彼の青春そのものであるといつてよいと思います。

マクナマラは最近、「自分は生涯を通じて戦争の一部だった」と述懐しています。人類史上最も血なまぐさいという二十世紀の、自分はまさに一部を構成した（大半は加害者側に立って）と告白しているわけです。物心がついた二歳のころ、当時住んでいたサンフランシスコで、第一次世界大戦終結を祝う祝賀行事を見たことに始まり、第二次大戦には経営管理の専門知識を買われ、二十九才のハーバード大学助教授から陸軍将校として従軍し、米ソ冷戦時代には国防長官としてベトナム戦争の指揮をとったのですから、この言葉にウソはありません。「戦争の落とし子」という、こうした反省から、『ベトナム戦争回顧録』と、その完結編ともいふべき『果てしなき論争』が生まれました（二冊とも拙訳で共同通信社刊）。

だが、それだけでは、二十一世紀の人類に対するマクナマラのメッセージとしては不完全、と見る人物がここに現れます。「不完全」というより「不徹底」であり、もっと具体的にでもっと詳細な物語が必要、というわけです。米ドキュメンタリー映画界の巨匠と呼ばれるエロール・モリスがその人で、マクナマラに食い下がって前後二十三時間もの長時間の独占インタビューに成功します。戦争の悲劇に彩られたその生涯を、マクナマラ自らの口を通じて紹介したのです。「戦争の霧——ロバート・S・マクナマラの生涯からの一の教訓」と題するこの映画は、何と二〇〇三年のアカデミー賞長編ドキュメンタリー賞をはじめ、各種の賞を総なめしました。「戦争の霧」という言葉は、マクナマラによると、中国の古典からとったということで、友人によりますとクラウゼウィッツの例の「戦争論」にも登場するようですが、非才の小生は原典の名を承知しておりません。ご存じの方はいったん戦争の危機が起きると、どんなに賢明な政治家でも、冷静で合理的な判断力を失い、深い霧に包まれたかのように混乱した行動を取る、というものだそうです。

マクナマラをスクリーンの上でいわば裸にして見せたこのドキュメンタリー映画の監督のエロール・モリスはニューヨーク生まれで、根っからの映画人間です。ウイスコンシン大学で歴史を学び、映画界に身を投じました。歴史や社会の暗部に光を当て、善悪の単純

な二元論を廃して真実に迫る作品で知られ、今では米国で最も尊敬され、独創性のあるドキュメンタリー映画の制作者の一人と見られています。一九九二年に、「車椅子の天才」こと英国の宇宙物理学者のホーキング博士に密着して、最新の素粒子物理学の状況を噛んで含めるように説明してもらい、「A Brief History of Time」を制作、サンダンス映画祭でグランプリと監督賞をダブル受賞しました。この映画を元に編集したのが同名の本で、邦訳は『ホーキング、宇宙を語る』（早川書房 一九九二年）で、世界的なベストセラーになりましたので、お読みの方も少なくないと思います。

「戦争の霧」の誕生

エロール・モリス監督が今回の映画の着想を得た理由は少し変わっています。モリスは一九九五年に出版されたマクナマラの『ベトナム戦争回顧録』に大きな感動を受けました。同時に彼は、新聞などでの書評が、これをマクナマラの「告白」ないしは「懺悔」と誤解していることにも注目しました。もしこの受け取り方が正しいのであれば、歴史上一回限りのベトナム戦争を、初期の段階で推進したマクナマラという一人の人物が、自分の判断や行動を自己批判し、その上社会に謝罪したことになります。

しかし、モリス自身の述懐によりますと彼は、マクナマラがこの本をありきたりの回顧

録にせず、自分や同僚の政府高官たちがなぜこのような過ちを起こしてしまったのかを理解しようとしている、と受け取りました。そこで彼は、マクナマラの精神の内部で起きていることを猛烈に知りたくなったのです。モリスの想像通り、マクナマラはベトナム戦争——そればかりか二十世紀の全ての重大危機についても——を、歴史上ユニークな悲劇と受け止める代わりに、次の世紀に同じ悲劇を決して繰り返さないための教訓を与えてくれるものにとらえていたのです。マクナマラによると、(アメリカのウイルソン大統領が第一次世界大戦について形容したように)戦争を終わらせるための戦争などというものは、この世にはありません。もしあるとしても、それを見届ける人類は一人もいないことでしょう。というのも、全ての戦争を終わらせることのできる戦争は、全面核戦争だけであり、その結果を見届け、喜ぶことができる人は、地球上にいないはずだからです。

マクナマラが、自分がその拡大に重要な役割を果たしたベトナム戦争について、「間違った政策だった」と述べたものの、「間違いを起こして申し訳なかった」とは、ついに一度も口にしなないのは、ある意味では当然なのかもしれません。全ての戦争を平和裏に終わらせるには、人間性を根本から変革する必要があるわけですが、そんなことは誰にもできない仕事で、マクナマラがベトナム戦争での自分の判断の過ちを認め、教訓を引き出すのはともかく、自分の行動を謝罪するのは、ある意味で戦争の不可避性を否定するのと同じ

で、傲慢と考えているからだと思われれます。

謝罪しない「戦犯マツク」

ドキュメンタリー映画「戦争の霧」を見た日本の観客、なかでも太平洋戦争の記憶を今でも生々しく持っている六十代後半以上の人たちが最も強い印象をうけるのは、太平洋戦争で若きマクナマラが深い省察もなまま果たした恐るべき役割ではないでしょうか。

開戦当時二十五歳で、ハーバード大学経営学大学院で経営管理を教える最年少の助教であったマクナマラは、士官候補生たちに統計管理を講義していましたが、陸軍省の求めにより入隊します。中佐としてロンドン第八航空団、インド、中国大陸、最後にマリアナ諸島に本拠を置く第二十航空団に勤務しています。一九四四年にサイパンを陥落させた米軍は、B 29を使って日本本土への長距離爆撃を開始しました。このルートは米軍部内で「ヒロヒト・ハイウェイ」と呼ばれました。指揮官はのちに戦略空軍（SAC）司令官、ついで空軍参謀総長の要職を歴任する猛将カーチス・ルメイでした。終戦直前に広島、長崎へ原爆を投下したのも、ルメイ揮下のこの第二十航空団です。ついでながら、ルメイは戦後一九六四年に、日本の航空自衛隊の育成、発展に貢献したとの理由で、日本政府から勲一等旭日大綬章を贈られ、自らB 29を操縦して横田基地まで飛来しています。事情はどうで

あれ、史上最も残虐といわれる原爆投下作戦の責任者に日本は最高級の勲章を贈ったことになります。

話は戻ります。一九四四年に入って、日本本土に直接の爆撃ができるようになっても思ったより効果が少ないことが分かると、ルメイはかねて目をつけていた経営管理の専門家のマクナマラ中佐に、空襲の効果を飛躍的に高める方策の立案を命じます。B 29爆撃機はそれまで高射砲の届かない高度七〇〇〇メートルの高空からの爆撃を繰り返していたのですが、マクナマラはこれを思いきり低高度にし、大都市の住民を対象にした夜間爆撃を提案しました。低空から爆撃すれば、地上砲火に狙われやすくなり、それだけ米軍兵士の犠牲も増えることになるのですが、マクナマラは、これもやむを得ないと考えたのです。いくら皮肉な類推をすれば、撃墜される米軍パイロットの数に比べれば、戦果ははるかに大きい、と「費用対効果比」の計算をしたのかも知れません。

いずれにせよ、新たに採用された焼夷弾を使用しての無差別じゅうたん爆撃によって、膨大な死傷者が出るようになりました。昭和二十年三月十日未明に行われ、十万人もの無残な死者を出した悪名高い東京爆撃もこうしたマクナマラの勧告の線に沿って行われたものでした。ただしマクナマラは焼夷弾使用のアイディアは自分ではないと語っています。

「戦争の霧」の中でマクナマラは、モリス監督の質問に答える形で、十万人もの民間人

の死者を出した東京空襲の実行者であるルメイ将軍も自分も「戦争犯罪人」だった、と述べています。そのすぐ後で彼は「(アメリカがこの戦争に)勝ったから許されるのだろうか?」と自分に問いかけていますが、答えは出しませんでした。前記のベトナム戦争での国防長官としての自分の責任問題と同じで、マクナマラは、抽象的には「戦争責任」という考え方を認めるものの、こうした戦争自体が人類の「業」であると考えており、個人が責任をとって謝っても仕方がない、謝りきれぬものでもない、と諦観しているのではないのでしょうか。第二次世界大戦から復員するとマクナマラは、米国の三大自動車メーカーの一つ、フォード自動車に入社し、急速に頭角を表します。そのキャリアの中で彼は、シートベルトの開発など、ドライバーの安全確保で自動車業界の推進役になったといわれています。評論家グレン・ホイップは、これらの安全措施の改善でマクナマラが何千、何万の人命を救った可能性があると述べています。こうした安全措施の改善策が、マクナマラの脳裏で、何百万もの悲惨な犠牲者を出した第二次大戦の記憶とどう結び付いていたのか、知りたいところです。

マクナマラとキッシンジャー

少し横道に逸れますが、ここでアメリカにおけるベトナム戦争の位置付けと、この戦争

の初期と終盤でそれぞれ指揮棒を振った二人の人物、マクナマラとキッシンジャーの評価について触れてみたいと思います。

邦訳「マクナマラ回顧録」の末尾の解題でも書きましたが、二〇世紀のアメリカの歴史の中で、「栄光に包まれた戦争」は第二次世界大戦しかありません。この対極として、屈辱に満ちたベトナム戦争があったことを、すべての米国民が知りながら、めったに口に出そうとはしないのが現状です。アメリカ史上最も長期間に及んだこの戦争で、何よりも不思議なのは、戦争が終結した日、すなわちパリで「ベトナム和平協定」が調印され、米軍の撤退が決まった一九七三年一月二七日のことは誰もが知っているのに、ベトナム戦争がそもそもいつ、誰の命令により、どの場所で開始されたのが、一度も明らかにされることがないという事実です。歴代の米政府も、国益の墨守にかけては政府にひけをとらない米マスメディアも、この戦争の起源を解明する努力を一向に払わないところに、トラウマに近い米国の暗いムードがほの見えます。起源を解明したくもない戦争ですから、その歴史的評価がいつまでたっても定まらないのは、むしろ当然といえましょう。

一九六一年四月に、例の悪名高いキューバ侵攻作戦がみじめな失敗に終わった時、当時のケネディ大統領が「成功には一〇〇人ももの親がいるが、失敗はいつもみなし児である」という諺をひき、あえて自分一人で責任を引き受けた故事が思い出されます。ベトナム戦

争は、このキューバ作戦以上の失敗に終わったのですから、いまにいたるまで「天涯の孤児」になっているのも無理からぬところでしよう。

戦争終結から三〇年たつても米国ではベトナム戦争の評価が一向に定まらず、その時々世論で動いている実態が、二〇〇四年秋の大統領選挙で浮き彫りになりました。民主党のケリー候補（上院議員）が若い頃従軍し、負傷して数々の勲章をもらっていた事實は、現在の有権者からそれほど評価されない半面、ブッシュ共和党候補（大統領）が、父親の影響力にたよって兵役を逃げ回っていた事實も、全くマイナス要因になりませんでした。

共和党の知恵者がケリーの昔の従軍仲間を（恐らくは金で）集め、ケリーの行動は勲章に値いするほどのものではなかった、とテレビで宣伝させたところ、ケリーの人気が急落しました。ワシントン・ポスト紙の調査でこれが「やらせ」と分かっても、ケリー陣営への致命的ダメージは最後まで戻りませんでした。

話を戻しましょう。

アメリカのベトナムへの軍事介入が当初「マクナマラの戦争」と呼ばれた時期がありました。マクナマラの戦争指導に不満を持ち続ける米国内の保守派の多くは、現在でもこのニックネームを使用しています。

しかし、今日の時点で、ベトナム戦争を総体として「マクナマラの戦争」ととらえるの

には、明らかに大きな無理があります。その理由はこうです。ベトナム戦争は「前半」と「後半」に分けて分析するのが合理的だと思われれます。そして、前半の主役をマクナマラ国防長官、後半の主役をキッシンジャー國務長官、と、それぞれの時期を象徴する人物で色分けすれば、さらに分かりやすくなるでしょう。二つの時期は歴史の潮流の中で見れば、同じアメリカのベトナム戦争の継続ながら、代表する二人の指導者の戦争観の間には重要な質的相違が見られます。「マクナマラのベトナム戦争」と「キッシンジャーのベトナム戦争」の間には、大きく違って次のような違いが指摘できるでしょう。

1 戦争の地政学的なとらえ方

ケネディ政権だけでなく、後継のジョンソン政権にあっても、マクナマラはベトナム戦争の主敵である北ベトナムを、東南アジア地域の攪乱的要因としてとらえていました。限られた地域での「敵」と見たのです。彼によると北ベトナムは、「かいらい」である南ベトナム民族解放戦線（米側の通称ベトコン）を使って、独立主権国家である南ベトナムを崩壊させ、かくて全ベトナムを力によって統一、国際共産主義陣営に従属させることを狙っており、これを阻止するのがアメリカのベトナム軍事介入の最終目標としていました。対照的にキッシンジャーは、ニクソン政権の世界戦略遂行の阻害要因となっている北ベトナムを力で排除することをベトナム政戦略のカナメとし、この線に沿ってベトナム戦争

終結のシナリオを描きあげます。キッシンジャーにとって北ベトナムは、世界帝国アメリカの「ノドにささった小骨」だったので。自分のベトナム観の浅薄さを悟ったマクナマラが、任期の後半ではベトナムからの撤収を主目標にしたのも、キッシンジャーが、ベトナム戦争遂行の残虐さについて世界中から批判を浴びても、ついに一步も譲らなかつた背景も、二人のかくも違ったベトナム戦争へのビジョンにありました。

2 戦争の倫理学

北ベトナムのとらえ方が、マクナマラとキッシンジャーではこのように大きく違うことから、戦争の人間の側面を見る目も二人では対照的になります。軍事作戦を政治や外交の手段、つまり必要悪と見るマクナマラの回顧録には、ベトナム戦争の拡大に伴う南ベトナム国民の苦難の増大へのヒューマンな懸念が随所に見られます。

一方のキッシンジャーにとって、ベトナム戦争は米国の全世界的な国益のために捧げられる小さな犠牲に過ぎません。キッシンジャーは「ベトナム戦争を名誉ある形で終結させることが、世界平和のために不可欠である。そうでなければ、国際秩序確立の見通しを複雑にするような力が解き放たれることになろう（ヘリング著『アメリカの最も長い戦争』一九八五年 講談社）と述べ、大義名分を背にしたアメリカの戦争の進め方には何の制約も感じません。そしてキッシンジャーはそのころから、ニクソン大統領の指示に従い、

「野蛮かつ懲罰的な打撃」を北ベトナムに加えるための計画の立案に入りました、これらは、主要都市に対する猛烈な爆撃や、重要な港湾の封鎖だけでなく、ある特定の状況下では戦術核兵器の使用計画さえ含まれていた、と伝えられます（前記ヘリング著書）。

戦争を終結させることを中心的な公約として有権者の支持を受けて登場したはずのニクソン政権下で、インドシナ半島に投下された米爆弾の総量は、ジョンソン前政権時代のそれを軽く上回ります。ベトナム戦争の終結から二〇年後にベトナム政府が、和平文書の調印者キッシンジャー國務長官ではなく、開戦初期のマクナマラ国防長官（肩書きはいずれも当時）をハノイに招待し、心をこめて歓待した背景には、二人のベトナム戦争観、あるいは世界観の相違がハッキリと影を落としているといえます。

アメリカが戦争に行かなかった日

ネオコンやキリスト教右派の発言力が強い今日のブッシュ政権では、世界のどこであれ、アメリカの気に食わない国であれば、アメリカの介入を受けないという保証はありません。しかし、いまからちょうど五〇年前のアメリカでは、ベトナム情勢が風雲急を告げたのに、良識ある国会議員らが政府を強く牽制し、参戦を思いとどまらせる、という「戦争に行かないアメリカ」の時代があったのです。この話は二〇〇〇年に共同出版した「ジャーナリ

ストの二〇世紀」(電通刊)という本の中で私が詳しく書いてあるので、ここでは短く触れることにしましょう。

一九五四年三月フランスは、第二次世界大戦前のインドシナ植民地を取り戻そうと、ベトナムに遠征軍を派遣したのですが、ホー・チミンを指導者とするベトナム独立同盟(ベトミン)の頑強な武装抵抗のため次々と敗北、ついに有名なディエンビエンフーの要塞に逃げ込みます。これをのちの北ベトナムの名将ボー・グエン・ザップ率いるベトミンの大部隊が包囲しました。フランスはNATO同盟国のアメリカに軍事介入を懇望します。トルーマン政権が当時、NATOの欧州側の中心メンバーとしてフランスに期待をかけているのをフランスは熟知していました。トルーマンの方針は後継のアイゼンハワー大統領にも引き継がれ、一九五四年になるとアメリカはフランスのインドシナ戦費の七八%を肩代わりするほどになっていました。

さて、ディエンビエンフーからのフランスの救援要請を受けたアメリカでは、制服組のトップで強硬派として知られるラドフォード統合参謀本部議長が、フィリピンの米軍基地からの空の攻撃を提案しました。反共を売り物にしている若手のニクソン副大統領も、米軍の投入論を擁護します。肝心のアイゼンハワー大統領はと見ますと、例によって事態を静観中です。問題は政治力と行動力を合わせ持つ政権切つての実力者ジョン・フォスタ

ー・ダレス國務長官でした。安保条約と抱き合わせて対日講和条約の成立を演出した立役者です。反ソ、反共では当時右に出る者のなかったダレスは、米国のベトナム（インドシナ）軍事介入を裏口から実現させるべく、一計を案じました。そして一九五四年四月三日、國務省五階の会議室に八人の議会幹部を招き、インドシナへの軍事介入について猛烈なロビー工作を行います。

ダレスとラドフォードはこの秘密会で議員たちに、インドシナ半島が共産陣営に失われれば、東南アジア全域の安全保障が危うくなるとの「ドミノ理論」をまくし立て、アメリカの軍事介入への議会の支持を要望しました。十年後の一九六四年夏にジョンソン政権が「トンキン湾決議」の採択を米議会に要請したときと同じ論理です。六四年の米議会が老獪なジョンソンに屈伏したのは、今では歴史になっていますが、五四年の時は違いました。与野党の八議員とも、アメリカの性急な単独武力介入には消極的で、まずは米国と一緒に参戦してくれる同盟国を集めるようダレスに注文をつけたのです。この五四年の秘密会に招かれた民主党の実力者の一人が、十年後に大統領になっているジョンソンというのも、歴史の大きな皮肉です。

条件を付けられたダレスはやむなく、このあと三週間かけて、アメリカと統一行動をとってくれる友邦を探しました。現在の言葉でいえば、「有志連合」の諸国を募ったのです。

しかし、最大の望みをかけていた英国のチャーチル首相にすぎなく断られ、それ以外の諸国への工作も不調に終わりました。現在のブレア首相は、半世紀前の大政治家チャーチルと比べると、まことに不肖の後継者だったといわねばなりません。チャーチルはダレスから当時受けたベトナム参戦の打診を、あとでこんな風に辛辣に表現しています。

「われわれが（米政府から）要請されているのは、米議會をミスリードして軍事作戦を承認させるのに手を貸すことだ。この軍事作戦は、それ自体が効果がない上、世界を大規模な戦争の瀬戸際にまで連れて行き兼ねないものである」。こうして、一九五四年四月三日は、米現代史上に特記されるべき「アメリカが戦争に行かなかつた日」となったのでした。

マクナマラの11の教訓

もう一度話を下に戻しましょう。最初にとりあげたドキュメンタリー映画「戦争の霧」の英語のサブタイトルは、「マクナマラの生涯から得られた11の教訓」というものです。といっても、この11の教訓なるものを選び出したのはマクナマラ本人ではなく、モリス監督だと思われませんが、11の教訓を以下に並べて見ましょう。

- 1、敵の身になって考えて見よ
- 2、理性は何の助けにもならない
- 3、自己を超えた何かのために
- 4、効率を最大限に高めよ
- 5、戦争にも目的と手段の釣り合いが必要である
- 6、データを集めよ
- 7、目に見える事実だけが正しいとは限らない
- 8、理由付けを再検討すべし
- 9、人は善をなさんとして悪をなす
- 10、決して「決して」とはいうなかれ
- 11、人間の本性は変えられない

ところで、モリス監督がこのドキュメンタリー映画に「マクナマラの生涯から得られた11の教訓」のサブタイトルを付けたのは、マクナマラの『ベトナム戦争回顧録』に書かれている、アメリカがベトナムで犯した失敗の11の理由から連想したものと思われまます。「モリスの11教訓」とマクナマラ本人による11の教訓はまるで違うので、参考のため

に、ベトナム戦争回顧録に見るマクナマラ本人による11の「ベトナムの教訓」を要約して掲げておきましょう。省略されている主語はすべて「アメリカ」です。

- 1、相手方の行動がアメリカに及ぼす危険を過大評価した
- 2、南ベトナムの国民と指導者を、アメリカ自身の経験で判断した
- 3、相手国のナシヨナリズムを過少評価した
- 4、相手国の歴史、文化、政治、指導者についての深刻な無知
- 5、米国の近代的でハイテク装備の軍事力の限界を認識せず
- 6、大規模軍事介入の前に、議会と国民を引き込んだ率直な討議をせず
- 7、国民に状況を十分説明せず、団結を維持できなかった
- 8、全ての国を米国の好みに従って作り上げる権利を持っていると信じた
- 9、国際社会が支持する多国籍軍と合同での軍事行動を取らなかった
- 10、国際社会には、すぐに解決できない問題があるのを認めなかった
- 11、複雑な政治、軍事問題に効果的に対処できる政府の組織を作らなかった

映画に現れた11の教訓はやや抽象的で、回顧録のそれは具体的という違いはありますが、

いくつかの共通点が見られます。相手方の行動基準を相手方の視点から眺めようとしなかった、というのはその一つです。というより、ベトナム戦争でアメリカが当初犯した過ちの大半は、これに尽きるといえそうです。

モリス監督があげた11の教訓の中で私が強い印象を受けたのは、「教訓5」、つまり「戦争にも目的と手段の釣り合いが必要」というものです。マクナマラは、生涯で直面した三つの重大危機、つまり太平洋戦争、キューバ危機、ベトナム戦争のそれぞれにおいてこの準則を適用しています。ただし、残念ながら全て危機が過ぎ去ってからのことでした。太平洋戦争では、東京が一九四五年（昭和二十年）三月十日、四月十四日、五月二十四、五日と三回にわたって、低空から焼夷弾攻撃を受け、最初の空襲だけでも十万人ともいわれる死者と数え切れない負傷者を出しました。マクナマラがこの映画の中で、「戦争に勝つためなら一晩で十万人の市民を殺してもいいのか？ われわれ（たぶん上司ののルメイ將軍と自分）は戦争犯罪人だ。勝てば許されるのか？」と自問していることはすでに触れました。現在のマクナマラが、戦争（あるいは闘争）を人間の原罪のように考えていることはさきほど申し上げましたが、この自問自答はそうした諦観を基礎に、戦争をなくすることは不可能である以上、目的に釣り合った手段を用いて戦うべきだ、と彼独特の「戦争倫理学」を提唱しているのではないかと思われまます。「目的に釣り合った手段」を採用すれ

ば、当然ながら死傷者も限定されることになるわけです。太平洋戦争に限っても、「目的に釣り合わなかった手段」には、広島、長崎への原爆投下をはじめ、ドイツのドレスデンやロンドン、東京への都市爆撃などが真つ先に頭に浮かびます。

一九六二年十月のキューバ危機は、市民に一人の死傷者も出さずに「目的（キューバに配置した対米攻撃用の中距離核ミサイルの撤去）」を達成した点で、歴史に残る外交的成果の一つといえるでしょう。「手段」は外交だけであつたのです。この事件でマクナマラは表立って中心的役割を果たしたわけではありません。しかし、アメリカ国立公文書館に保存され、映画「戦争の霧」で使用されているホワイトハウスでの録音テープによりますと、キューバ危機が発生してから間もない十月十六日にケネディ大統領と会談したマクナマラは、「米ソを巻き込む軍事衝突（核全面戦争）が起きてしまった後の世界がどうなるのか、自分には全く想像もできません」と告げています。つまりマクナマラはここで大統領に、キューバに持ち込まれたソ連のミサイルを排除するという「目的」と、核全面戦争による世界の壊滅的破壊という「手段」の釣り合いが取れないことを、軍の最高責任者として進言していたわけです。ケネディ自身、この危機の全期間を通じ、軍事力による打開といった妄想を抱いていなかったのは確かですが、マクナマラのこの提言が、ケネディがフルシチョフ・ソ連首相との外交交渉によって、最終的に事態を打開するにあつたの重

要なヒントを提供したと評価しても間違いではないでしょう。

目で見る「オーラル・ヒストリー」

今回の話の最後に、歴史を検証する最新の有益な手段の一つとして、マクナマラが回顧録の続編である『果てしなき論争』で提唱している「批判的オーラル・ヒストリー」に触れておきたいと思います。歴史や史学を専門にしておられる方々のご意見をお聞きしたいところです。

人や組織の経験を、関係者へのインタビューを重ね、歴史的証言として残す「オーラル・ヒストリー」の存在は、最近日本でも少しづつ知られるようになってきました。この手法は、テープレコーダーが普及し始めた第二次大戦後に欧米でスタートし、二十世紀の終わりころには歴史研究の一大潮流となって今日に至っています。

日本で先駆的に体系的なオーラル・ヒストリーに取り組んでいる学術組織としては、^{みりやたかし}御厨貴教授（現在は東大教授も兼任）がリーダーをとめる政策研究大学院のチームが知られています。その主催で、二〇〇二年十一月には東京で、「オーラル・ヒストリー」

の国際シンポジウムが開かれました。基調講演に立った神戸大学の五百旗頭真^{いおきべまこと}・神戸大教授は「欧米に比べて公文書の水準が低い日本では、実際に（政治、経済、文化などに）携

わった人に語らせることが重要だ。官僚世界などの独自文化や、現在進行形の問題を探るのにも役に立つ」と、オーラル・ヒストリーの重要性を強調しました。

しかし、オーラル・ヒストリーには、内在的な欠陥とはいわないまでも、いくつかの問題点があります。有名政治家や財界人、高級官僚などによる「回想」に見せかけた自慢話や、失敗を歴史の目から覆い隠すための釈明などがひんばんに入り込み、これらを修正ないし訂正する手段もないのがそれです。日本ではオーラル・ヒストリーの重要な対象が当面は（元）外交官とされているようですが、そのまま厳密に歴史の証言として使用できるのかどうか。二十五年を経過した出来事について、政府が毎年選択的に発表する「外交文書」から類推しても、外務省や外交官の「証言」の客観性や信憑性には、いま一つ問題が残るようです。

この他にもう一つの重要な問題があります。関係者の記憶は、どれほど誠実な人物であっても、ときにあいまいであったり、思い違いをすることが避けられません。一步譲って、何の瑕疵もない優れた個人的回想を得られたとしても、一つの時代、一つの事件を代表させるのに一人の記憶では通常不十分であり、複数の重要な関係者による同時並行的かつは立体的なオーラル・ヒストリーが不可欠、というのがそれです。「大逆事件」、「韓国併合」、「二・二六事件」など、二三の例を思い浮かべるだけでもこれは明らかでしょう。しかし、

日本でのオーラル・ヒストリー研究の現状を見る限り、こうした点についての配慮がまだ全くといってよいは見られませんが。

何よりも問題なのは、オーラル・ヒストリーを外交史あるいは国際政治史に通用すると
の視点が、日本では目下全く欠けていることです。世界史が西洋史ではなく、本当の意味
での「世界」史になったといわれる二十世紀には、数多くの国民国家が関与し、多数の政
治家や軍人、経済人らが活躍した大事件であふれています。マクナマラが直接関与した太
平洋戦争、キューバ危機、そしてベトナム戦争は、そのほんの一部に過ぎません。こうし
たオーラル・ヒストリーの限界を克服するために、アメリカで考え出されたのが「批判的
オーラル・ヒストリー」という手法といわれます。口火を切ったのはハーバード大学ケネ
ディ行政大学院で一九六二年十月のキューバ・ミサイル危機を検証するプロジェクトとい
う形でスタートしました。キューバ危機の検証の一部始終については、私が一九九二年に
刊行した『パクス・アメリカーナの転回』（岩波書店）第二章「キューバ危機とマクナマ
ラの法則」で取り上げていますので、ご関心のおありの方はのぞいてみて下さい。

このプロジェクトは一九九〇年からはブラウン大学のワトソン国際問題研究所に移され
ました。同研究所はこのあとケネディ政権初期のビッグス湾（コチノス湾）事件、一九七
〇年代の米ソ・デタントの崩壊過程などを「批判的オーラル・ヒストリー」のテーマとし

て取り上げました。そして一九九五年以降は、ベトナム戦争での「失われた機会」の探求に全力を注いでいます。マクナマラの「ベトナム戦争回顧録」やその続編の「果てしなき論争」は、こうした一連の多国間プロジェクトの見事な成果の一つと呼ぶことができます。

それについても、日本の歴史学会や政治学会が、オーラル・ヒストリー・プロジェクトに安住し、「批判的オーラル・ヒストリー」への移行に何の関心を示さないかに見えるのは、小生には不思議でなりません。もし日本でも、歴史認識の重要なアプローチとして、こうした「批判的オーラル・ヒストリー」の手法が採択されるならば、適用されるべき歴史の出来事は山のようにあります。思い付くだけでも、満州事変の原因となった柳条湖での満鉄線路爆破事件（昭和六年）や、日中全面戦争のドロ沼に突入する端緒となった北京郊外の盧溝橋での軍事衝突（昭和十二年）の背景、ハル・ノートをめぐる日米双方の困惑（昭和十六年）、米政府が真珠湾攻撃をどこまで予知していたのか——などなど。複数の国家がかかわるこうした出来事の解明は、単独の国家の事業としては不可能であるばかりか、無理に進めると一方的な結論に突き進む危険があります。

太平洋戦争もキューバ危機も、ベトナム戦争さえも急速に忘れられつつある現在、老春の最後のエネルギーを燃やして、「誤解が生む戦争」をなくそうと、世界を騒げ回るマクナマラは、まさに二十一世紀のドン・キホーテに見えます。マクナマラが突進する「風

車」は、平和という気楽なスローガンを叫びながら殺し合う人類の原罪にも似た闘争本能といえるようです。孤独な現代の老騎士マクナマラが、十分望みを果たすことなく「歴史の霧」の中へ消えていくのは時間の問題ですが、それまでの間、われわれは優しい目でこの希有な人物を見守りたいと思います。長い間ご静聴ありがとうございました。

(桜美林大学名誉教授・元共同通信社ジュネープ、ワシントン支局長)